



No.46 Sep.2012

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 国立文化財研究所  
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1  
<http://www.nabunken.go.jp/>

## ■ 奈良文化財研究所創立60周年記念 飛鳥資料館秋期特別展 「花開く都城文化」

会期：2012年10月19日（金）～12月2日（日）

飛鳥資料館ではこの秋に、奈良文化財研究所創立60周年を記念して、秋期特別展「花開く都城文化」を開催します。

古代の日本を取り巻いた、唐や朝鮮三国。各国には、整然とした花の都・都城が置かれていました。日本にも、大陸の文化が導入され飛鳥の都や藤原京、そして平城京が造られていきました。本展は、日本・中国・韓国の各国の都城から発掘された遺物を中心とし、古代の各国の交流や、さまざまな違い、特徴、更には生活の様子が浮かび上がるような展示会としており、各国の「花の都城」の文化を目のあたりにできます。本展は、飛鳥資料館としてこれまでに無い大規模な展覧会となり、多くの来館者の皆様が興味を持って楽しんでいただけるような展示の工夫も凝らしています。

しかし、奈文研創立60周年記念の大きな展覧会というだけではありません。本展は奈文研と中国・韓国の国立研究機関との共同研究の成果を発表する場でもあります。海外の研究機関との交流で、奈文研の研究員が中国や韓国での都城で発掘作業をおこなったり、その反対に先方から研究員を受け入れて、平城京や藤原京と一緒に汗を流して発掘作業をおこなっています。そういうった様子は、これまで奈文研ニュースにもたびたび掲載されています。そんな三国の研究機関のこれまでの友好の証として、貴重な出土遺物を奈文研の節目の年にお借りすることができます、こうしてこの秋、飛鳥資料館で皆様のお目にかけることができます。

そして、今回の展覧会に合わせて、当館では大規模な模様替えをしています。秋期特別展に合わせてがらりと印象を変えたロビー、第一展示室、特別展示室で来館者の皆様をお迎えします。

文化の秋に、生まれ変わった飛鳥資料館で、花の都城の文化に触れてみるのも優雅な過ごし方ではないでしょうか。多くのお客様のご来館をお待ちしております。

（飛鳥資料館 成田 壬）



「花開く都城文化」展示室イメージ



## 発掘調査の概要

### 藤原宮朝堂院朝庭の調査(飛鳥藤原第174次)

2012年4月2日より、藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査を実施しています。本年度の発掘区は、一昨年(第163次)および昨年(第169次)の発掘区のすぐ東側に位置しています。朝庭の空間利用のあり方を検討するとともに、下層に存在する藤原宮造営期の遺構の実態解明を目的に調査を進めています。

これまでの調査で、朝庭は最終的に拳大の礫石を敷き詰めて整備されていることがあきらかになっています。礫敷上には下層に存在する遺構が凹凸として現れていることが想定されるため、例年、礫敷をどのように記録していくかが課題となっています。そこで今回の調査では、3Dレーザー測量の方法により、礫敷上に現れた微地形や凹凸を立体的に記録することにしました。下に掲げた画像は、取得した標高データを、グラデーション状に色分けしたもので、赤い部分は標高が高く、青い部分は標高が低いことを示しています。発掘区北側には、後世の瓦敷の通路状遺構が帯状のラインとなって現れています。礫敷は全体的に南東から北西にむかって下降していますが、イレギュラーに陥没している場所が数カ所確認でき、その下層には遺構が存在する可能性が見込まれます。

こうした成果を踏まえ、7月からは部分的に礫を取り外し下層調査に着手しています。今後の調査の進展にご期待ください。(都城発掘調査部 廣瀬 覚)



朝庭礫敷面の標高グラデーション図(上方北)

### 藤原宮東方官衙北地区の調査(飛鳥藤原第175次)

内裏・大極殿院・朝堂院などからなる藤原宮中枢部の東西には、現在の中央官庁に相当する官衙建物群が展開していたと考えられています。このうち、今回は藤原宮東半に広がる東方官衙地区の発掘調査をおこないました。調査区は藤原宮東方官衙北地区の南西部、藤原宮大極殿の東300m程の位置にあたります。調査期間は2012年4月2日から6月25日までで、調査面積は494m<sup>2</sup>です。

本調査区の西隣でおこなった第78次調査では、内裏と東方官衙の間に位置する内裏東官衙の建物や区画塀、区画の間を通る東西方向の宮内道路などを検出するとともに、東端で東方官衙の建物とそれを囲む区画塀の一部を検出していました。本調査区はこれら東方官衙の建物・南区画塀、および内裏東官衙で検出している東西宮内道路の東側に位置します。

調査の結果、調査区北側では想定どおりの位置で東方官衙を区画する東西塀と、その北に建つ長大な東西棟建物を検出しました。いっぽうで、調査区の南側では予想されていたもう一つの官衙の北区画塀はなく、西隣で検出していた宮内道路も延びてこないことがわかりました。少なくとも本調査区内では、今回検出した東方官衙区画塀の南側に、塀や溝のない空間が広がっていたことになります。

更に、この空間の一画には礎石建物が建っていたことが新たに判明しました。藤原宮の官衙配置では道路と想定されていた場所ですので、礎石建物の検出は予想もしていない発見でした。検出したのは南北3間分・東西2間分です。その規模や性格は今後の調査により解明していくことになりますが、藤原宮にはまだまだ驚きに満ちた発見が多く眠っていることを実感した調査でした。

(都城発掘調査部 森先一貴)



検出した礎石建物(北西から)

## 平城京左京三条一坊一坪の調査(平城第491次)

平城宮の正門として偉容を誇る朱雀門、その南東すぐに位置するこの地は、平城京の地割りでは左京三条一坊一坪にあたります。西側は平城京内唯一の大路・朱雀大路に、北側はそれに次ぐ二条大路に面しています。

この左京三条一坊一坪は、奈良市教育委員会などによるこれまでの調査で、坪を囲う築地塀などが設けられていなかつたことがあきらかとなっています。朱雀門前という立地とあわせて考えれば、この坪は門前の広場のようなスペースとして利用されていた可能性が高いと言えましょう。

この地に国土交通省による平城宮跡展示館(仮称)の建設が計画され、事前調査として奈良文化財研究所が2010年度から継続的に発掘調査をおこなっています。これまでの調査で、奈良時代前半に造られた大型の井戸や平城宮造営期にまで遡る可能性のある鉄鍛冶工房群が見つかること、徐々に坪内の様子があきらかになってきています。また、2011年度冬の調査では坪内道路(=左京三条一坊一坪を南北にほぼ二分する、幅約9mの東西道路)を約44mにわたって検出し、加えてそれよりも前に建てられた南北棟の長大な建物群も見つかりました。

今回の調査は、この南北棟建物群が南にどこまで展開するか、また、それより南ではどのような土地利用がなされていたなどをあきらかにすることを主な目的として、2012年4月2日より開始しました。調査面積は1,872m<sup>2</sup>です。

調査の結果、3棟の南北棟建物は南へ更に2間分ずつ広がることがわかり、それぞれの規模が確定しました。一番西の建物は桁行が10間にもおよび、2カ所の間仕切を持つなど構造も特徴的です。真ん中の

建物はすべての柱筋に柱をもつ総柱建物で、床面積は130m<sup>2</sup>近くあります。総柱建物というと倉庫の可能性が考えられますが、もしこれが倉庫なら、この大きさは異例です。

興味深いのは、3棟の建物が南の柱筋を揃えて建てられていたことです。ここから建物群が同時期に、同一の計画のもとに建てられたことがうかがえます。また、建物群の南端は左京三条一坊の一・二坪を画する三条条間北小路の北側溝から100尺(約30m)の距離に位置しており、条坊設定とも密接に関わりながら建設された可能性も考えられます。

建物群の南は、調査区東南隅で新たに見つかった建物1棟以外は目立った遺構がなく、広場のような様相を呈していたことが判明しました。以前の調査でも同様の指摘がなされていましたが、その主な根拠は築地塀がないということでした。今回、広い範囲を面的に調査した結果、既存の知見を裏付けることができました。《何もない》ことも、ときに重要な成果となりうるのです。

今回の調査成果は、6月23日に現地説明会を開催し、広く多くの方々にお伝えしました。梅雨の最中で天気が心配されました。当日は幸運にも晴天に恵まれ、650人以上の方々にお越しいただき、ナマの現場をご覧いただくことができました。調査成果の「早く・広く・正確な」発信も、私たちの大切な責務と考えています。この奈文研ニュースも、そのような取り組みの一環です。

今回の調査は7月6日をもって終了ましたが、2012年度夏の調査として、更に南側を継続的に発掘しています。左京三条一坊一坪の調査は着実に進んでいます。いずれその全容があきらかになることでしょう。

(都城発掘調査部 山本 祥隆)



調査区全景(西から。建物群の南柱列が揃えられている)



現地説明会の様子(北東から)

せんづみようへき  
**そびえ立つ磚積擁壁**

今秋、平城宮跡資料館では特別展「地下の正倉院・第一次大極殿院のすべて」を開催します。50年にもおよぶ第一次大極殿院地区の発掘調査成果の集大成をまるごとお見せする予定です。

その展示物の一つ、第一次大極殿院から出土した磚について紹介します。磚とは粘土を焼いて作るレンガのことです。古代では、おもに宮殿や寺院、官衙の基壇や床にもちいられますが、第一次大極殿院では土留めの材としても使われたことがわかっています。

第一次大極殿は、大極殿院の広場の中でも北側の一段高い壇の上に建てされました。この壇の南面には磚を積んで土留めをしました。これを磚積擁壁と呼んでいます。磚積擁壁の高さは2mにもなり、磚は約25段積まれていたと考えられます。

磚積擁壁に使われた磚は黒灰色で、大きさは長辺約30cm、短辺約15cm、高さ約8cmあります。現在日本で使われているJIS規格のレンガのサイズは長辺21cm、短辺10cm、高さ6cmですから、体積にして約3倍大きいことがわかります。

磚はほかの考古資料に比べて一見地味ですが、積み重ねると大変な迫力になります。秋の特別展では、現地での検出状況の剥ぎ取り模型が展示されます。当時、大極殿院に足を踏み入れられた者しか目にすることことができなかつた莊嚴装置を、ぜひ想像してみてください。

(都城発掘調査部 石田由紀子／企画調整部 中川あや)



姿を現した磚積擁壁(大部分の磚は失われていた)

## 親子のための古代入門教室の実施

2012年7月27日と31日に「親子のための奈文研たんけんツアー」を催しました。平城地区は深澤副所長が、藤原地区は杉山副部長が案内人となり、夏休みを利用した子どもたちとともに、平城宮・藤原宮の復原建物や発掘現場、それに各整理室を回りました。当日は、猛烈な暑さにみまわれましたが、子どもたちは、普段はなかなか見られない作業の様子や遺物を真剣に見学していく、中でも木簡の見学では、研究員の説明をよそに、自分が読める字があることに嬉々としている子どもたちの姿が印象的でした。平城地区でおこなわれた拓本体験では、瓦整理室の拓本隊の指導のもと、子どもたち全員が見事な拓本を完成させました。出来あがった拓本は、きっと宝物となつたことでしょう。

また、8月8日には、「親子のための古代体験—植物で美しい色を染めよう」に、「染司よしおか」(京都)の吉岡更紗さんをお招きし、藍染体験を実施しました。素材に使ったのは、副所長が丹精込めて育てた蓼藍<sup>たでいん</sup>。これを1時間ほど手揉みし、漬して、布に色付けするという手間のかかる方法でしたが、布は美しい藍色に染まり、出来映えは古代人顔負けのものとなりました。

本企画は、これから文化財保護の担い手である子どもたちに文化財に興味を持ってもらおうと開催したものですが、拓本や藍染めに夢中になつている子どもたちの姿、完成了ときの笑顔を見るに、この主旨は充分に果たされたのではないでしょうか。

(都城発掘調査部 芝 康次郎)



藍染め体験の一コマ(右端は吉岡更紗さん)

## 西トップ遺跡の解体修理開始

奈良文化財研究所は1993年より長きにわたってカンボジア・アンコール遺跡群の調査研究に携わってきました。2002年からは西トップ遺跡と呼ばれる石造寺院を継続的に調査してきましたが、研究を進めるうちに、この遺跡が崩壊の危機に瀕していることがわかつてきました。おりしも2008年には建物の一部が崩落。その危機は目のあたりのものとなりました。

ひとまず応急処置としてスチール製の足場によつて建物を補強したものの、根本的に修理するにはいったん建物の石材をクレーンで解体し、基礎を強化したうえで再構築する必要があることがわかりました。しかし、これはあくまでも文化財の修理です。コンクリートなどの現代的な素材を使用するのは極力ひかえ、もとあった石材を再利用し、なるべく建造当時の技術を用いて再構築する必要があります。そのためには、修理前の遺跡の現状を詳細に記録し、ふさわしい解体修理の方法を検討せねばなりませんでした。それには3年あまりの時間を要しました。

そうした学術的な記録と検討を経て、昨年末に修理計画書をカンボジア政府(APSARA機構)とユネスコの委員会(ICC-Angkor)に提出。その承認を経て、いよいよ今年3月に解体修理工事が着工しました。起工式では難波企画調整部長(所長代理)とAPSARA機構のマオ・ロア局長がスピーチをおこない、両国の機関が手をたずさえてこの貴重な文化遺産の復興をおこなっていくことが表明されました。

今日も現地では奈文研の現地駐在員・現地スタッフおよび石工・作業員など10数名によるチームで工事が進められています。(企画調整部 石村 智)



クレーンによる崩れかかった建物の解体修理

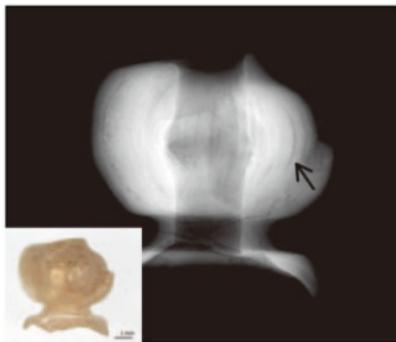
## 【重層ガラス玉の材質・構造調査】

京都府長岡京市の宇津久志1号墳から出土した重層ガラス玉の材質・構造調査を実施しました。X線透過撮影による内部構造調査の結果、孔の形状が中央付近で内湾していることや、気泡が孔と同方向にガラスの曲面に沿って細長く伸びていることがわかりました。これらのことから、本重層ガラス玉は、軟化したガラスを引き伸ばして製作した径の異なる2本のガラス管の間に金属箔を挟みこんで加熱し、工具で括れを入れることにより連珠として製作されたと考えられます。このような高度な技法で製作された重層ガラス玉は、1~3世紀頃の黒海周辺地域の遺跡から多く発見されています。

材質については蛍光X線分析法による非破壊測定を実施しました。その結果、金属箔は金(Au)、ガラスの種類はナトロンガラスであることがあきらかとなりました。ナトロンガラスとは、ソーダ石灰ガラスのなかでも融剤にエジプトなどで産するナトロンと呼ばれる蒸発塩(天然ソーダ)を利用したと推定されているガラスのこと、ローマ帝国などで盛んに製作されたことが知られています。更に、ローマガラスで消色剤として多用されたアンチモン(Sb)が検出されました。

このように本資料は製作技法・化学組成の両面からローマ帝国領内で製作されたガラス玉である可能性が高いと考えられます。今後、国内外の資料の類例調査が進むことで、日本で流通した重層ガラス玉の種類やその流入経路についてもあきらかになるものと期待されます。

(埋蔵文化財センター 田村 朋美)



ガラス曲面に沿って細長く伸びた気泡が確認できる

## 【第36回世界遺産委員会概要】

2012年6月24日から7月6日にかけて、ロシア連邦サンクトペテルブルク市において第36回世界遺産委員会が開催され、奈良文化財研究所から2名が参加しました。ここではその概要を報告します。

世界遺産委員会は年に1回開催され、世界遺産一覧表への記載などの主要な事項はここで決定されます。委員会のメンバーは、世界遺産条約(正式名称：世界の文化及び自然遺産の保護に関する条約)締約国総会において選挙で選ばれる21の委員国ですが、そのほかにも諮問機関、委員国以外の締約国、遺産関係の専門家などが多数参加します。

議事は、①危機遺産リストに記載されている遺産の状況や危機遺産リストからの削除、②世界遺産の保存状況、③世界遺産一覧表への新規記載、の3つが大部分を占め、①については、フィリピンのコルディリエーラの棚田群など2件が危機的状況を脱したとして危機遺産リストから外れました。②に関しては、保全状況や開発による環境の悪化、地域紛争などの理由により、英国のリヴァプール海商都市をはじめとする5件が危機遺産リストに記載されました。③については、今回は日本からの推薦案件はありませんでしたが、新たに26件(自然遺産5件、文化遺産20件、複合遺産1件)が世界遺産一覧表に記載され、これにより世界遺産一覧表への総記載件数は962件(自然遺産188件、文化遺産745件、複合遺産29件)になりました。

1972年に採択された世界遺産条約は、今年40年という節目の年を迎えました。11月6日から8日には京都市において「世界遺産条約採択40年記念ユネスコ最終会合」が開催されることになっています。  
(文化遺産部 青木達司/企画調整部 田代亜紀子)



第36回世界遺産委員会の様子

## 飛鳥資料館 無料開放のお庭

飛鳥資料館の前庭は入場無料であることをご存知でしょうか。当館には無料駐車場があり、お庭には休憩スペースがありますので、飛鳥へ訪れた人々の休憩スポットともなるでしょう。しかし、休憩場所としてだけでなく、館内とは違った見所があります。



飛鳥資料館前庭

館内には重要文化財である須弥山石や石人像など、石造物の実物が展示されています。これらは本来、庭園に飾られ水が流されていました。また、発掘された当初から欠けた部分があります。そこで、欠けた部分を復元したレプリカをお庭に配置し、実際に水を流しています。その他にも、出水の酒船石、愛嬌のある亀石のレプリカなどもあり、庭園にぎわせています。

見所はレプリカだけではありません。春には桜が咲き、梅雨にはアジサイの花が、夏は美しい芝生の新緑、これから秋は美しい紅葉です。また、小鳥から野ウサギまで意外な訪問者と出会うこともあります。こうした美しい自然環境以外にも、お庭は様々なイベントの会場、改装中のミュージアムショップの仮店舗など、意外な活躍をみせます。

当館では今後とも、お庭で十分楽しめる工夫をしてまいりますので、どうぞお気軽にご入場ください。そして、お庭で興味が沸けば、是非館内にも入っていただければと思います。

(飛鳥資料館 成田 型)

開館時間：9:00～16:30(入館は16:00まで、月曜休館) お問合せ：☎0744-54-3561(飛鳥資料館)

## 平城宮跡資料館 奈良文化財研究所創立60周年記念

秋期特別展「地下の正倉院・平城宮第一次大極殿院のすべて」

大極殿とは、古代の宮都における中心施設で、元日朝賀や天皇の即位など、国家儀式の際に天皇が出席する場所です。平城宮では、奈良時代前半と後半で別の位置に建て替えており、奈良時代前半の「第一次大極殿」は、宮の正門である朱雀門の真北に位置していました。

第一次大極殿院は、第一次大極殿を中心建物とする、築地回廊に囲まれた広大な空間のことです。南面の築地回廊の中央には門が、更に、その両脇に楼閣建物が付設され、壮大な景観を誇っていました。

第一次大極殿院地区に初めて鍼が入ったのは1959年のことです。それ以来、50年の間に47回にもおよぶ発掘調査を経て、ほぼ全貌があきらかになりました。本展では、第一次大極殿院地区で出土した瓦、巨大な柱根をはじめとする建築部材、整地土に紛れ込んだ木簡、建物を取り壊す際の祭祀具、今はなき建物を彷彿とさせる検出遺構の写真や図面など、50年の発掘調査成果をギュッと凝縮してまとめてお見せします。『続日本紀』などの歴史書だけでは捉えきれない、当時の国家の中核の様子を垣間見ることのできる、またない機会です。

(企画調整部 中川 あや)

会 期：2012年10月20日(土)～12月2日(日) 開館時間：9:00～16:30(入館は16:00まで、月曜休館)

お問合せ：☎0742-30-6753(連携推進課 ギャラリートーク:会期中毎週金曜日14:30～(11月第4週のみ木曜日)

### ■ お知らせ

奈良文化財研究所創立60周年記念事業

飛鳥資料館 秋期特別展

2012年10月19日(金)～12月2日(日)

「花開く都城文化」

平城宮跡資料館 秋期特別展

2012年10月20日(土)～12月2日(日)

「地下の正倉院・平城宮第一次大極殿院のすべて」

特別講演会

2012年10月6日(土)

「遺跡をさぐり、しらべ、いかす—奈文研60年の軌跡と展望」

於：一橋大学 一橋講堂

日中韓国際講演会

2012年10月20日(土)

「日中韓古代都城文化の潮流—奈文研60年都城の

発掘と国際共同研究—」

於：なら100年会館

### 第111回公開講演会

2012年11月3日(土)

於：平城宮跡資料館

### ■ 記録

現地説明会

○平城第49次発掘調査(平城京跡左京三条一坊一・二坪)

2012年9月15日 635名

飛鳥資料館 写真展

2012年8月4日～9月17日

第2回写真コンテスト「遙かなる華の都」 5,385名

第110回公開講演会

2012年6月30日

250名

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.go.jp/>

Eメール [jimu@nabunken.go.jp](mailto:jimu@nabunken.go.jp)

発行年月 2012年9月